

「アースキン・コールドウェル」(1903-) (Gale Research 版『現代作家自伝シリーズ』第一巻)

「演習」II学生(二宮達也他18名)訳

1903年12月17日の早朝、ジョージア州西部のモアランド近郊の松林と綿花地帯で、3部屋しかない農家にて私は呱々の声をあげた。父親はアイラ・シルヴェスター・コールドウェルといって、連合改革長老教会の牧師であり、母親はキャロライン・ベル・コールドウェルといい、以前は南北キャロライナ州、ヴァージニア州の神学校や女子大学で、英語とラテン語の教師を勤めていた。

私の人生で、未だよちよち歩きの搖籃期にあった時、料理用ストーブにかけてあった、グラグラ煮えたつ油の大鍋をひっくり返してしまい、皮膚を焦がす油は、私の胸部や腹部に零れ落ちた。母から聞いたのだが、長期にわたる治療の後で、地元の医師は両親に、「この子は、善良なる神のご意思により、何かの目的のために生かされたに違いない。でなければ、彼はもうとっくに、この世には居ないだろう」と告げた。

最初の遊び友だちを持つようになったのは、3歳の時だった。彼は私と同じ年頃の白黒混血少年で、両親は小作農民で、近くのひと部屋しかない、丸太小屋に住んでいた。本名は定かではないが、私にはいつも“ビスコ”というふうに聞こえたので、近隣に住む間は、私は彼のことをそう呼んでいた。

ビスコと私の交遊は、最初夏に始まり、彼とわが家の間の砂地の小径を、私たちは裸足で行きつ戻りつしたのだが、日没までには帰宅下さい、とつねづね言っていた。しかし、冬の最初の寒い晩、ビスコの家の薪火の暖かさにさそわれて長居し、就寝時がくると彼に寄り添って、蒲団のなかにもぐり込んだ。すぐに両親の知るところとなり、連れ帰られることになったが、道々、必ず自分の家に帰って寝るように、ビスコの両親だって、夜は彼に家で寝て欲しいと思うだろうよ、と諭された。

6歳になった時、私はどこか遠く見知らぬ土地へ転住する、興奮と期待で夢中になった。日夜列車で旅し、幼年期の馴染み深い風景を後にして、未知の土地に入っていく体験は、やがて習い性となり、私の人生の終わりまで、たびたび繰り返されるよう運命づけられることになった。

私たちの新居は、ペンキも塗っていない下見板を外壁としたA.R.P.⁽¹⁾教会の牧師館で、南キャロライナのプロスペリティという小さな町にあった。人口300人余のこの町は、以前のフロッグ・レヴェル（蛙が原）という呼称から、住民投票によって、このように改名したばかりであり、不利なイメージを払拭することにより、さらなる経済の繁栄をもたらしたい、と願つてのことであった。プロスペリティの町は、グリーンウッド、アベヴィル、アンダーソン、グリーンビルの綿花工場や、キャロライナ・ピードモント（山麓地域）のその他の工場町に、周囲を取り巻かれていて、小さな綿花用三脚起重機一基、製材所ひとつ、大きな農器具店一店舗を持つ以上に発展する町にはなりえなかった。

私たちが新しい家に移り住んでから間もなく、ある真夜中、その家は全焼してしまった。火

災から免れたものといえば、わずかに私たちの夜着と、父の革製のスーツケース、それに母の金時計のみであった。次の記憶に残っていることといえば、私が最初の三輪車を買い与えられた時のことと、正看護婦であった私の叔母が、母に数時間も効く睡眠剤をあたえ、その間に叔母と父は私を床屋に連れて行き、長い赤毛の髪を男の児風に調髪してしまった時のことである。

プロスペリティでは、その他の特筆すべきことはなにも起こらなかったが、ある日の放課後、近くのクリークのはとりにたむろしていた何人かの10代の少年たちが、マスター・ベーション・クラブの会員の写真を所持していた。私が見せてと執拗にせがむので、彼らは遂に一枚の写真をみせてくれた。私よりかなり年上で、体格もずっと発達した裸の少年たちが写っていることを除けば、何の変哲もない写真にすぎなかった。

南キャロライナに転住して、2年以内に一家は、ヴァージニア州、テンバー・リッジに転居した。この土地は、シェナンドア河流域の緑の丘陵地と、リンゴの果樹園が近隣にある片田舎であった。生まれて初めて、私には遊び友だちがいなかった。家の近くに石灰岩の採石場があり、私はほとんど毎日そこへ出掛けていき、口を開けた採石場の端に腰をおろし、石工たちがドリルを使ったり、下にある青緑の岩を爆破するのを見物していた。

ある日の午後、労働者の一人が、ドリルで開けた発破孔へダイナマイトをいれ、それを粘土で塞ぐ作業中に、私の目前で爆死してしまったので、採石場への日参は、突然終わりを告げることになった。家へ走り帰り、何が起こり、靴の脱げた片足が、私のごく近くに落下してきたことを話すと、あまりにも危険過ぎるから、採石場には2度と行ってはいけない、と釘をさされてしまった。

年末には、私が9回目の誕生日を迎える、1912年の早くに、一家は北キャロライナ州のシャーロットへ転居した。私の家は未だ建築中の住宅団地の中の、長屋住宅の新しい一軒であったが、一区画全体が、こういった建物で占められていた。最初、私の遊び相手は、私と同じ年頃の長い亜麻色の髪をした少女で、最近新築したばかりの別の長屋に住んでいた。私たちのお気に入りの遊び場は、あちこちの未完成の建物の中で、午後遅くなると、大工たちはその日の仕事を終えて帰宅し、オガ屑の山や、妙な切り口の木片や、さまざまの寸法の釘が、あたり一面に散在していた。

いつものように遊びに耽っていたある日の午後、その亜麻色の髪の少女は、「お医者さんごっこ」をしたい、と言いだした。そうした遊びは、今までに体験したことが無かったので、私は物覚えが悪い方なので、と言い訳をはじめた。私の遊び友だちは、思いやりがあり、かつ辛抱強かったので、次の何日かの午後は、彼女が医者の役割をし、私に看護婦の役をさせて、この遊びの仕方を教えてくれた。

シャーロットに一年間住んだ後で、私たちは、また引っ越しすることになり、今度は南キャロライナ州はブラッドレイへ移り住んだ。この町は人口200人ほどであり、州の西側のサバンナ河の流域に位置していた。私はまだ公立学校へは通学したことがなかった。一家がある場所から他の場所へと転々と移住したことと、母が「読み、書き、ソロバン」を教える家庭教師となってくれたのがその理由である。そうしたわけで、私には朝から晩まで町を徘徊する自由に恵まれ、日中に走るすべての列車を見る事ができた。しばらくの間、全国規模シェアの週刊新聞「グリット」を販売したり、ブラッドレイの小麦色に日焼けした5、6人の洗濯女に、洗濯用の青み剤を1パック10セントで売りつけたりした。洗濯洗剤がマーケットにあふれるように出回り、「グリット」の配達代金の回収が困難になると、私は地元の郵便局長にたのんで、郵便

物の仕分け作業の手伝いをさせてもらった。

しばらくたつと、私は手紙の仕分け作業、切手の消印押し、床掃除などの日課を、たいへん手際よくこなすので、愛想のよい局長は、近くの乾物屋でチェッカーをして、彼の大半の時間をつぶしていた。しかしながら、日当なしの私の見習期間は、わずか数週間で終わりとなった。ワシントンからやってきた郵便監査官が、ある日の午後、この掘っ建て小屋同然の郵便局を訪れたのであった。監査官は、窓口越しに長いこと無言で私を睨みつけた後に、郵便物の入った部屋のドアを開けるように、と無愛想に命じた。戸口から入ってくるとすぐに、彼は私の名前と年齢を尋ねた。尋問を受けた後、私は厳しい警告調で、郵便局を出ていたら2度と再びこの建物の中へ入って、合衆国郵便物に手を触れてはならない、と命じられた。悲しいことに、郵便局長は、一週間以内のうちにその職務を解かれた。

第一次世界大戦が勃発して一年後の1915年は、私は身長も伸び、ひょろ長くなっていて、やがて13歳になろうとしていた。私たち一家は、南キャロライナ州からテネシー州のアトカ近郊の小さなコミュニティーに転住した。そこはミシシッピー河の近くで、メンフィスからおよそ30マイルの所に位置していた。

夏も終わりの頃、ひとりのYMC A⁽²⁾の秘書が陸軍駐屯地における戦時活動の基金調達のために、寄付を募りながらの旅回りの途中に、私の父を訪問した。私が秘書の面前に連れだされると、戦時下における愛国心を縷々開陳した後で、彼はミリントン陸軍基地のYMC A専属の自動車運転手がひとり必要であるときりだした。この基地はメンフィスの郊外にあり、当時飛行機パイロットと砲手の訓練場となっていた。

愛国心に同調しながらも、おそらくはいくらかの不安を持ちつつ、両親は承諾し、感じのよい振舞のその秘書官と一緒に同日、私はミリントンのYMC Aの仮兵舎へと行った。基地では、常に黄褐色の服を着ることが義務づけられていた。私は、ボイスカウトの制服の一部を身につけ、陸軍の物品販売所で、全ての陸軍記章を取り外した、ほかの品物を買うことで、その条件を満たした。

私はすぐに、YMC Aの運転手としての職務は、その秘書官やYMC Aの職員が数日間の休暇をとる際に、メンフィスまで乗せてていき、その後で、ミリントンへ乗せて戻ってくることであることが分かった。職員の一員が見張り門を通り過ぎた後、車を直ぐに止めるようにと言ったのは、ミリントンからメンフィスのピーボディホテルまでの、運転手の仕事を始めてから間もなくのことであった。私たちが止まったのは、手を振っている若い白黒混血少女たちの小さな集団が立っている道端であった。

私の乗客は2人の少女の名前を知っていた。そして彼が彼女たちを呼ぶと、すぐに車に近よってきた。少し言葉を交わして、彼女たちは車の後部ドアを開けて同乗してきた。彼女たちは、メンフィスまでの道中、ずっと大きな声で笑ったり、くすくす笑いをしていた。その職員がピーボディホテルで車を降りると、私は2人の少女を目的地へ連れていくようにと言われた。乗せてくれたお礼を言って、手を振りながら、彼女たちはビール・ストリートにある、明るくライトの灯ったカフェの前で車を降りた。

数日後、私が書記に2人の少女をYMC Aの車でビール・ストリートに連れていったことを話すと、彼はもう2度と見張り門の向こう側で止まり、YMC Aの車に売春婦を乗せるべきではないと厳しく言った。私がこの命令を受けてまもなく、書記は他の地区へと転任させられ、

私はすぐに職務を解かれ、家へ帰された。

私が初めて家を出てからずっと続けられてきた、活動と興奮の長い期間が突然終わったことは、私の世界がもうお仕舞いだという感情を残した。私は野原や森や道端の、ありふれた光景のなかでは落ち着かず、憂鬱で何の興味も見つけられずに、何日間も過ごした。しかし、ついに私は、私の記憶の中で、今だに鮮やかである、変わった世界での経験の中で得た、精神や本質を取り戻したいという欲求を持っていることに気づいた。私は過去の数週間に起こった出来事について、誰かに話したり、告げたいという願望はまったく持っていた。私が感じたことは、他人の面前ではなく、個人的に自分自身を表現することの必要性であった。そこで私は鉛筆と紙をもち、小説を書き始めた。

何日間も、施錠した部屋の中に閉じこもり、私は青色の野線を引いた便箋に、田舎から逃亡して、空腹と孤独で、都会に辿りついた少年の話を書いた。始めから終わりまで起こった出来事は、ビール・ストリートと、近くの路地の範囲に限定されていた。伯父さんが住んでいる家の道を見つけてほしいと、助けを求めている少年の嘆願に対して、これに反対する衝突は、白人と黒人の両方を巻き込んだ。2人の若い混血児の少女が、彼の伯父さんの家を見つけるのを手伝おうと提案した時、彼女たちは、もし少年を手伝うのを止めないのなら、ムチ打ちの刑にすると脅かされた。小説が終わるまでに、それは計22ページを超え、7章で構成されていた。この小説のために選ばれた題名は「都会に出てきた少年の物語」⁽³⁾であった。

私の小説作品を父と母が見た時、彼らの反応は迅速でかつ断固たるものだった。私はすぐに、私の単語のスペルや、句読点の打ち方、筆跡などが容認できない、と告げられた。おかげに、私は手続きがととのいしたい、近くの公立学校に入学するように言われた。私は、同じ年頃の女の子や男の子と一緒に学校に行け、と言われて嬉しかった。しかし私は小説家としての私の努力について、一言の評論も両親から聞かなかったことに深く絶望した。それからずっとになって、私は自分の作品が、決して存在していないかったかのように、無視されることよりも、作品の酷評であっても聞かせてもらう方がありがたい、と思った。

私の年令がその時13歳だったことと、私の母が過去数年間、家庭教師として子供の教育に当たったことは、考慮されるべきだという母の主張により、校長先生は私を7年生に入学させることを決めた。私がその後一年半で8年生を終えるまで、私はすべての科目において、合格点をとることができた。そしてさらに、私は地理の先生が行った、とても長いテストにおいても好成績を修めることができた。

私が地理の知識によって受けた賞は、エドワード・ギボンの『ローマ帝国の勃興と衰退』という本であった。その本には見返しに50セントという値段がついていたが、その本の何がそんなに私を魅了しているのか？ 2、3ページ読んだあとで、私はローマへ行き、7つの丘のひとつからテーベレ川を見下ろすまで、自分の人生に決して満足しないだろう、ということを知った。それ以上に、その本は私が所有した最初の本だった。いつもその本を部屋において、それを見るたびに、私はいつか私の國の人々についての本を、自分で書くことができるかどうかと思った。

1918年の春、学校を終えて間もなく、両親は私にテネシー州からジョージア州の小さな町へ引っ越すことにしたと告げた。そこは東ジョージアの綿農業地域にあるレンズという町で、オーガスタとサバンナ川から30マイルの所に位置していた。

私たちの所有物—衣類、寝具、台所用品、そしてその他の道具を入れた、たくさんの小さ

な箱——はわが家の5人乗りのフォード・モデルT型の旅行用自動車の後座席と床に詰め込まれた。出発する準備ができた最後の時に、私たちはシャグという名前の、白と黒のブチ犬のスペースを、確保するのをすっかり忘れていたことに気づいた。

私たち家族の一員として、シャグは辛抱強く、車の後ろの座席の衣類や、その他の家財道具の中へ飛び込もうとしていた。シャグはコリー犬と鳥猟用ポインター種の、異種交配で生まれた犬で、とても大きくて、たくましい犬だったので、私たち2人が入るには、十分なスペースがなかった。父は、自分と母の間の前の座席に、シャグを座らせたらどうかと提案したが、この提案は、毛むくじらの犬を膝の上に乗せて、南部まで旅するつもりはない、という母のきつい言葉で拒否されてしまった。

ちょっとした話し合いのあと、両親は一番いい方法は、家の近所を徘徊する狐の襲撃から、庭鶏やアヒルを守る、立派な番犬になるようにシャグを訓練してみたい、としばしば言っていた友人の農夫に、この犬をあげることだ、と決めた。私の父は、シャグの首をロープで縛り、母でさえ涙を拭ったりして、犬と長々と別れを告げた。犬は牧草地を横切って、農夫の家に連れていかれた。

出発が遅れ、私たちがやっとテネシー州からジョージア州へ向けて出発した時には、午前中も遅くなっていた。その日の残りの日中は、ずっと快調に旅を続け、夕暮れまでには私たちは、北ミシシッピーの小さな町に着いて、一夜をゲスト・ハウス（下宿式小ホテル）で過ごした。

翌朝、私たちが朝食を食べ終わって、出発する用意をしていると、私たちの車の下で、穏やかに眠っているシャグがいた。私の父が車のエンジンをかけ始めるとすぐに、シャグはすっかり目が覚めて、立ち上がるにはあまり時間がかからなかった。それから尻尾を熱心に振って、父側の車の側面についた、幅の広い乗降用ステップとフェンダーの上に飛び乗った。私たちがゲスト・ハウスを去って、車で通りの角や道路のカーブをまわっている時でさえ、シャグは足を滑らせて地面に落ちたりすることは一度だってなく、とても上手にバランスをとっていた。

険しい丘や、深い砂や、舗装されていない道路の泥は、しばしば時速数マイルで車が進むのを妨げた。そしてシャグは車からとび降りて、乗降用のステップの自分の居場所に戻る頃合いだと気づくまで、車と並んで早足で歩くのだった。ミシシッピー州と、アラバマ州を通って、ジョージア州東部に行く残りの旅の間、シャグは、昼間は私たちの姿を決して見失わなかった。そして彼は、私たちが車で出て行って、自分をまた置き去りにするかもしれない、と恐れているかのように、夜はいつも車の下にもぐり込んで眠っていた。

私が1919年に、レンズ高校に入学した時、中学校の履修単位不足のために、1学年のクラスに登録すべきであったのだが、そうではなく2学年のクラスに編入させられた。この理由として考えられることは、私がもうすぐ16歳になるとということと、立ち上がると6フィートの身長があり、見たところ体が大柄で、頑強であったからだった。そのような情況のもとでは、私は疑いようもなく、私より若く、背の低い生徒の中での授業に、混乱を來したことであろう。

私は無頓着な生徒だったし、授業の時限や、時にはまる一日の授業をさぼる口実を見つけるのは、少しも困難ではなかった。私が正規の学校教育に無関心であるのは、教科書教育を習得するのに進度の遅い、つまらない退屈な過程の中にいるよりも、日常生活の中で人々の生活や行動に、より興味があったからだと思う。

私は家から数ブロックのところにある、綿実油工場でアルバイトをして、運搬用の槽に綿実

をシャベルで掬くって入れる仕事で、一晩に1ドル稼ぐことができるというパートの仕事を見つけるまで、そう長くはかからなかった。勤務時間は週に5晩、真夜中から朝の6時までで、私の仕事仲間はというと、時々、町の白人家庭の下働きや、庭師としての仕事も請け負う、混血児や黒人たちだった。

私が一ヵ月以上、綿実油工場で働くことによって、レンズの町の人々と知り合いになったことは、教育的な喜びであった。毎晩毎晩噂話を聞いていると、その噂話のいくつかは、スキャンダルであったり、不幸な話であったり、またユーモア話であったり、それらすべてがおおっぴらな興奮をもって語られていた。そして私は、このような人々や、彼らの個人的な生活についての心奪われる物語は、口頭ではなく、活字で表現される必要があると感じた。しかし、このことすべては突然に終わりがきた。私は仕事の終わったある朝、朝食の食卓の席上で寝入ってしまったので、両親が夜中にぐっすり眠っている間、私がこの一ヵ月してきたことを、両親に告白しなければならなかった。

夏の間、学校が休みになると、私は郡の広範囲にわたって往診して、患者の診察をする親切な医者の運転手になった。私はまもなく郡医の業務になれ親しんで、私は職業として医学の勉強をすることさえ考えた。しかし、妻が思っていたより一時間早く昼食を食べ帰宅したある農夫の夫に、その医者が2連発の散弾銃で撃たれてひどく傷つけられた時、この芽を出しかけた野心は完全に消えた。私が彼を看てくれる別の医者を、できるだけ早く見つけようと、レンズに車で戻っている間に、その医者は肩からの出血をなんとか止めることができた。

私の次の行動は、野球シーズンの開幕で始まった。これは私が地元のセミプロチームの監督に、得点記録係として無給の奉仕を申し出た時だった。そして2・3試合後、私はヒットやエラー、捕殺、盗塁を満足のいくよう正確に記録することができた。それから私は、父の大きな堅型のアンダーウッド・タイプライターで、その試合の報告を書き、それに伴うボックススコアと一緒に、報告書をオーガスタ・クロニクル社に郵送し始めた。時々、地方通信員として習慣的に、私は自分の出版されたスポーツニュースのコラムを糊付けして、それらを新聞社に郵送した。私は印刷になって現れるコラム毎に2ドルもらった。

私はレンズ高校の2年目が始まったとき、3学年のクラスに在席していたのだが、17歳の誕生日が数ヵ月後に迫っていた。2学年後期の私の成績は、かろうじて合格するかどうか、きわどいところであったが、それを改善しようと望まずに新学期を迎えた。その時までの私の主要な興味は、スポーツ記者から一般の新聞記者として活動する地位に出世した後、地方通信員として自分自身専念することだった。オーガスタ・クロニクル社に加えて、私はメイコン・テレグラフ社とサバンナ・ニュース社そしてアトランタ・コンステチューション社にも地方通信員として籍を置いていた。私はオールバニーと、ウェイクロスと、ジョージア州の他の地域の新聞社の地方通信員として働きたい、と申し出たが、それらのうち一社も、レンズの町で起こるどんな事件にも興味をもたなかつた。

時折、綿繰り機工場や製材所での火事とか、殺人といった出来事さえも、私の住む地域社会に起こった。その他には活字にする価値のある出来事は、きわめて稀なことだった。やけになつた私は、フロリダへの旅行中の観光客や、巡回伝道師たち、そしてカーニバルの役者たちにも取材を試みた。そんなニュースのネタは、すぐに使い果たしたが、地方紙「ジェファーソン・リポーター」の編集者兼オーナーのために、働くことはないかと考え、私は出かけていった。私は最初、給料なしの条件で、新聞ビジネスを学ぶための機会を与えられた。私は社会ニュー

スの取材を始めた。それには結婚、出生、そして死亡記事が含まれていた。それから後になって、新聞を印刷するための、手動印刷機のインクの入れ方や、廻し方を指示された。

1920年5月に卒業した高校のクラスの中で私は、教壇上で卒業証書を受け取らなかった唯一の生徒だった。私は卒業に必要な必修単位が不足していることが十分に分かっていた。そして卒業証書の替わりに、まぎれもない白紙の証書を受け取る準備がされていた。また私は両親から、特別な勉強によって、必要な単位を努力して取ることが可能であり、秋には大学に入れるだろうと言われていた。私は大学に行くことが、レンズという小さな町を離れるための、いい機会だと考え、卒業単位を取得して大学への進学を望んでいた。

数ヵ月後私は、南キャロライナ州のデュー・ウエストのアースキン・カレッジという名の小さな大学に到着した。私はこの大学の学生数が、レンズ高校の生徒総数よりもずっと少ないとということを知って、デュー・ウエストの町に落胆した、そして私は町の汚いメインストリートや、ごみだらけのキャンパスの風景からは、好印象を受けるどころではなかった。

しかし、最初の授業に出席した何日か後、上級生が私に、フットボール部に入部するつもりはないかと訪ねて来た。私は興味がすぐにわいた。私は中学、高校時代にフットボールの経験はなかったが、それが私がしたい何かであると分かった。その年は、代表チームの一員にはなれなかったけれども、コーチからの指示を忠実に守ってこつこつと鍛え、2軍チームでプレイした。

フットボールのシーズンが終わり、授業に出席することの他に、何か活動することを探していた私は、貨物列車に乗って長距離旅行が可能だということが分かった。たいていの旅行を可能にしたこの方法とは、鉄道操作場で車両が連結されるのを待ち、それから有蓋貨物車のドアが開いていないときを見はからって、ゴンドラ車にただ乗りすることだった。私の最初の旅に乗り合わせたひとりの親切な浮浪者は、旅行中には決して旅客車の手荷物車の連結部に乗ってはいけない、と忠告をしてくれた。なぜならその車両は、アメリカ合衆国の手紙を運んでいるかもしれないし、見つかれば逮捕され、投獄される可能性があるからであった。

大学の2年次が始まっていた時、コーチは私のフットボールチームでのポジションを保証してくれた。私はセンターか、ボールスナッパーをシーズンを通してこなしていた。この間に私の成績は良くなり、すべての授業に熱心に参加した。私はある教授に忠告を求めて、私の単位不足を克服するために、勉強スケジュールをどのように計画すれば、大学を2年後には卒業を保証されるのか尋ねた。

フットボールシーズンが終了して2、3日後に、私はある朝目覚めると、以前のように大学の不平をならしていた状態に逆戻りして、それでもう一度その宗教的な押しつけに腹を立てるという有様だった。私の新しい反感と敵意はすでに不可抗力になっていた。

この結果、私が指名されて、説教もどきのスピーチをさせられるであろう、キャンパスでの祈禱会に出ることを、義務づけられたくはなかった。同様に私は、神の創造の教義を教える授業に、無理やり出席させられようとは思わなかった。おそらく私は人間として、聖職者として、父を尊敬していた。なぜなら彼は人前で祈ることを学べとか、教会の奉仕活動に参加しろ、と命令しなかったからだ。人生の初期に、父は私に独立した思想を持ち、法律を守った行動を期待し、宗教については受け入れるのも、拒絶するのも私の自由だと言っていた。父の寛容と教えの結果、もし誰かが、不可知論以外のことを私に無理やり押しつけたなら、私は不快を感じたであろう。

1921年、秋も深まってフットボールのクラブ活動も中止になると、私はさらに遠くへと貨物列車に乗って、キャンパスからさらに離れた、シャーロットやチャールストンの町までも出かけて行った。そして、旅行をしていないときでさえ授業には出ず、宿題もしなかった。私の行為のこの結果、もし私が成績評価を改善しないなら、その課程の単位は取れないだろうと、教授たちから警告された。

私はアースキン・カレッジでの、制限の多い環境の中で、絶望的に不幸せになったとき、私は非学業的な生活を熱心に続けるのみならず、大学行政側を微発して、私を無理やり除籍しようとする方法を見つけさせようとさえした。しかし大学側は、私のいくつかの微発で私を除籍すべきだったのに、私の思惑通りにはいかなかった。最後にその学期が終わる2ヵ月前、3月下旬か4月上旬に、私は私自身でふんぎりをつけて、荷造りをし、ニューオーリンズへ行く旅客車に乗った。

生活費のためのバイトをしていて、私の寄宿舎への支払を多少貯金していたので、列車運賃のための十分な金を持っていましたし、デュー・ウェストを離れ、次に仕事を見つけることができるまでの間の生活費を貯えていた。貨物船の平水夫として、またレース場の少年馬丁としての、短期間の仕事に就いた後、私は何週間も失業していたが、次に雑誌購読販売員の一員として雇われた。その販売部長と8人からなる青年販売員チーム、そしてさまざまな年代からなる男たちがある夜遅く、ニューオーリンズで列車に乗り込み、霧雨の朝、夜明け前の暗闇に包まれた、ルイジアナ州のボガルーサという製材の町に着いた。

その販売員チームは2人で一組となって、各グループはそれぞれ製材所、または木工技術工場の、どちらかひとつに入行って行って、1ドルの値段で12回発刊される、狩りや魚釣りの雑誌を、労働者を対象に、購読予約の受付をするように指示を受けた。予約料として徴収した1ドルは、販売部長が25セント受取り、雑誌社には50セント、販売員に25セント支払うことを告げられていた。ところがその3日後に、販売部長は私たちが徴収したすべての金額を持って失踪してしまった。

私は、その販売チームから抜け出せないまま、次の日の夜にはたったひとりで、ボガルーサに取り残されてしまった。食べていくための別の仕事を探す暇もなく、2人の警官によってパトカーに乗せられてしまい、その日は急に終わってしまった。そこから3区画行った所にあるボガルーサの町の刑務所までを、パトカーで短い距離を連行されたのち、私はすぐに浮浪者として刑務所で調書を取られ、そして、上の歯並びが金歯で光っている、白髪頭の年とった黒人と一緒に、大きな独房棟に放り込まれてしまった。

私の親しい牢獄仲間が、私の生活の保護に対して関心を示してくれて、私のような白人青年でも、たとえどんな罪を犯したのであれ、審理もなしに刑務所に一ヵ月間か、それ以上の間留置されるかもしれないと言った。私が彼自身のことについて尋ねると、彼は自分の名前がボジョーと言い、彼の2匹のウサギ狩り用の猟犬が夜に吠えて、町の治安をかき乱すのを止めさせなかつたという罪を背負って、裁判を待ちながら刑務所に約2ヵ月間もぶち込まれていると言った。

数日後、木のスプーンと、カブの葉っぱと、皮付きの脂身を煮込んだブリキ製の鉢を、1日2回差し入れられて、私は何ヵ月間もこの刑務所に留置されるのかと思うと、恐ろしくなった。私は看守に頼み込んで、封筒と紙一枚を何とか手に入れることができた。すぐに父に手紙を書き、私がいる場所と、どうしてボガルーサの刑務所に入る羽目になったのかを伝えた。私が郵便料金として持っていた唯一のお金は、25セント硬貨であった。友人らしくボジョーは、手紙

に切手を貼って郵送してやるという看守を、信用しないように私に注意した。私は鉄製の監房をよじ登り、鉄格子のついた窓の格子につかまって、きっと自分の手紙を信用して郵送してもらえる、誰かに会えるのを、私は何時間も期待して待っていた。

午後遅く、私が、10歳くらいに見える黒人で、短く刈り込んだ髪をした裸足の少年に声をかけると、彼は刑務所のそばの雑草の生い茂った区画に立ち止まった。その少年は、格子のはまつた獄中にいる私をじっと見て、最初はためらったあげく、彼は近づいて来てくれて、私は自分で書いた手紙を、彼が郵送してくれるのに同意してもらうことができた。私は初めに窓から25セント硬貨を落とし、それから次に手紙を落とした。

少年はそのお金と手紙を拾い上げて、空き地の向こう側にたどり着くまで走った。彼は振り返り、ちょっと手を振ると通りを走って下って、姿を消した。それから私は、少年の手を振るしぐさからして、私を安心させるような素振りであったと、思い込んでずっと期待していた。

正確には4日後、ボガルーサにあるY.M.C.Aの書記官が、看守と共に独房に入って来て、私は釈放されたので、午後の電車で家に帰ってよいと言われた。私はボジョーにさよならを言うと、彼はびっくりしたように、目をぱちくりさせながら微笑みかけて、独房棟に君がいなくて淋しくなるが、家に帰れてよかったね、と言った。私は父への手紙を郵送する際に、よい忠告を与えてくれた彼にお礼を言いたかったが、どういうふうに自分の気持ちを伝えればよいのか分からなかった。その代わりに、私はレンズ高校でもらった金の指輪を指からはずして、驚いている恩人であり、友人である彼に、何も言わずにそれを渡していた。その後、Y.M.C.Aへ行く途中で、私の父が、ジョージア州のレンズの町にある家までの列車賃を、電報為替で送ってきたと告げられた。

ルイジアナ州での不運な出来事が終わって家に着くとすぐに、私はいくつかの日刊新聞の通信員の一員として再び働きに出た。ずっと私は、父に問いつめられて叱られると思っていたが、彼は「ルイジアナ州の低地地帯の生活はどうだった？」と尋ねた以外は何も言わなかった。その後考えてみると、父は私が南キャロライナ州にある大学を辞めた理由を、十分知っていたのではないかと思った。

私自身について言えば、自分が学生であった頃や、大学を退学してからわが身に起こった事を後悔することはなかった。事実、私の将来にも役立つような誠実さと、剽窃の忌避に関して、間接的ではあるが、私は貴重な教訓を受けたと感じた。この事件は、私が大学1年生の時に生じた出来事によって引き起こされた。ある最上級生が大学の年間誌に短編小説を発表した。その学生は、すぐに熟達した作家として褒めそやされた。その時、その小説が「サタデイ・イブニング・ポスト」紙に、6ヵ月前に発行された短編小説と、ほとんどそっくりの剽窃である事が分かった。学生も大学の理事会も、彼の作品が他の作家からの剽窃であることが非難すべきであると考えず、彼は大学を優等で卒業してしまっていた。

私に成功をもたらすのを手助けしてくれるような、より野心的な企画を持つ新聞社の地方通信員として働き、金ができるだけたくさん稼ぎたかったので、私は無給の通信員として、「ジェファーソン・リポーター」紙に戻って働きといとは思っていなかった。私はヴァージニア大学に入学する方法を見つけようと強く心に決めていた。

私の両親にとって、ヴァージニア大学の州の住民以外から入学して来る学生のための高い授業料を払うことは、不可能だということを理解していた。そして、さらに私は、高校やアース

キン・カレッジでの嘆かわしい成績によって、奨学金の資格を得ることは決してできないということに十分気づいていた。前途有望ではない将来だったかもしれないけれど、私は自分を落胆させる気はなかった。私は既知の、そして未知の困難に關係無く、道を見つける決心をした。

一所懸命に、人名簿や目録、そして私が手に入れることができた、他の役に立つ資料すべてをくまなく探し、私が資格を得、交付されることが可能であるかもしれない授業料を全額給付してくれる奨学金を見つけ、大喜びした。その特別の奨学金は、数年の間隔をあけて給付されていなかつたし、その奨学金は優秀さとか、必要性のために提示されたものではなかつた。

応募する学生のたったひとつの必要な条件は、彼が南北戦争に参戦した南部同盟の軍隊の兵士の直系の子孫であることを、証明することができるということだった。私には資格があり、それに応募し、そしてアメリカ連邦南部同盟諸州女子連盟から、4年間の奨学金が給付された。給付の許可と一緒に、短い手紙が添えられていた。その手紙には「UDC⁽⁴⁾の組織は君の応募書類を受理するまで、奨学生制度がまだ生きていることを、知る人はほとんどなかつたが、UDCのメンバーは喜んで君を助ける用意がある」と書かれてあった。

ブルー・リッジ・マウンテンの麓の小丘の起伏に、1923年の春の訪れる前年の秋に、私はヴァージニア大学に入学した。私は高校時代から熱望していた、生活や環境を持ちえたという完璧な気持ちを抱いていた。この上なく、学生生活を楽しみたかったが、それにもかかわらず、私は時間の一部を労働に費やす必要があった。この冬の間、私が仕事をしていた時間は、夕方6時から深夜まで、一晩1ドルの給料を支給されて、大学の近くの玉突き場で、玉をラックに入れる仕事をした。

夏、ジョージア州の私の家から、シャーロットヴィルに戻って来た後、私は大学で社会学と経済学と英語の講義を登録して、2年目が始まった。社会学と経済学は選択科目であったが、私は必修科目の講義である物理学や化学よりもこれらに、勉強の分野としては、より興味を持っていた。そして英語に関する限りは、私は作家となるための熟達を求めて、可能な限りの必要なものを学ぶことを熱望した。

その時までには、私はどんな形であれ、書くことを私の一生の仕事にしていきたい、という決心をしていた。私は将来の私にもっとも役に立つであろう、3つの主要な講義科目を選択していた。私が選んだ分野の手始めとして、玉突き場での仕事のあい間に、私は極く短いジョークを書き始め、大学のユーモア雑誌「ヴァージニア・リール」の編集者のドアの下に、それらをそっと入れておいた。私は数多く書いたが、その中の3編がその年の間に出版された。

シャーロットヴィルでの2年生の終わりまでに、私は大学院課程で英作文の指導をしているある教授に目をかけられたし、また別の教授の大学院課程の指導「ウィリアム・ワーズワースの詩の研究」の授業を受講することを許された。また、私は大学院課程における、社会学と経済学にも興味を持ち始めていた。

この、より高度の学問に専念していると、大学で2年生だった私が、なぜ大学院課程の授業が受けられるのかと、大学院課程を教える教授たちから疑問視されて、私は大学の学部長に呼び出された。学部長と私は、一時間中たくさんの論題について討議した。最後には、彼は私と握手をし、そして私に、教授たちによるささいな不平に悩まされないで、作家になることを妨げられないことを望んでいると、学部長は言ってくれた。

私は夏の間、ジョージア州に戻って、野球の得点記録係と、新聞の通信員としての生活を再開するのを望まなかつた。その代わりに、私はフィラデルフィアに行き、経済学を勉強するた

めに、ペンシルヴェニア大学のウォートン・スクールに入学した。私は、他の奨学金の恩恵を被っていなかったし、私の両親が、授業料や、フィラデルフィアでの私の生活費を、払う余裕がないということを、言われなくとも分かっていた。そして私の両親が、私がしていることを、認めようが認めまいが、私にとってはあざかり知らぬことであった。しかしながら、両親の沈黙は、恐らく彼らが反対してはいないということを示し、そしてまた、私が両親からの財政上の助けがなくても、フィラデルフィアで、なんとか生活してゆくことを、両親が望んでいる証であったのかかもしれない。

新聞の求人広告欄を見て、私は夜間勤務の売り子としての仕事を即時に得た。仕事場は、マーケット・ストリートの下の方の、こじんまりとしたスタンドであった。そして労働時間は夕方6時から深夜までであった。私がシャーロットヴィルで、プールルームの雑用係として稼いだ全額よりも、給料はかなりよかったです。その上、ホットドックやオレンジ色をした飲み物を、好きなだけ飲食することが許されていた。

午前中を経済学の授業に充て、夕方をダウンタウンで、すぐ近くのバーレスク劇場へ行く途中の人や、劇場から帰る人たちに、ホットドックを売ることに費やしながらも、午後は、私にはまだ自由があった。短い期間であったが、ウォートン・スクールの中国人学生から、彼がダウンタウンへ映画館や服を買いに行きたい時に、案内役兼ボディガードになってくれないか、と私は頼まれた。ボディガードとして振舞うのは初体験だったし、面白そうでもあった。私に支払われるサービス料金は役に立ち、また私はフィラデルフィアのダウンタウンへ、ほとんど毎日のように外出を楽しんだ。

ウォートン・スクールの夏季学期の終る頃、私はヴァージニア大学の授業がまもなく始まる事を、十分に認識していた。しかしながら、私は経済学の教科書と鞄取り売買の魅力にとても没頭してしまっていたので、その分野における実務的な経験を伴う、私の知識を修得する必要があると感じた。このことは、小売り業店での仕事を探すことにつながり、私は地区支配人からの、翌朝7時にクレスギイ雑貨店の地下の倉庫に出頭せよ、という指示文書を携えながら、ペンシルヴェニア州、ウィルクス・バー行きの列車に乗った。

クレスギイの従業員としての私の初仕事は、チェコスロバキアからの藁で包まれたガラス製品の大樽や、香港からのエプロンや胸当ての柵や、ドイツからの玩具のカッコウ時計の箱を開けることだった。その夕方閉店した後で、私は通りの側の、窓の陳列の飾り付けの手伝いを頼まれた。就職して最初の一ヶ月が過ぎた頃、進出に向けて訓練中の、熱心な何人かの青年たちから、近くの町にある他のクレスギイ・ストアーを、夜遅くと日曜日ごとに彼らと一緒に視察しないかと、私は誘われた。それは、私の倉庫の管理や窓の装飾のテクニックで、私が必要としているすべての実務的な経験を得よう、と決心した時のことだった。

地下室での職を離れて地上に出てきた時に、私はこの地域のセミプロのフットボールチームの一員になるために、テストを受ける機会があった。適性テストを受けた他の全員は、彼らが鼻柱の強いフットボール選手になることを決める前の生活は、まるで無煙炭の鉱夫であったかのように見えた。私は初めは練習試合のチームにおかれ、そしてできるだけ早く体力を強化するよう指導を受けた。これを実行することは、私にとっては容易なことではなかった。なぜなら私は背が高くて瘦せていて、150ポンド以上位の体重しかなかったからである。

練習試合と2、3回の試合に出場した数週間後、私の鼻が異常な形で片方に傾いているのにコーチが気づいた時、私はチームから外されてしまった。コーチは同情的だったが、鼻を骨折

して外された選手は、どんな医者の治療も役には立たないと、私は申し渡された。しかし、コーチは、ヘルメットがさらに良くなつて、鼻の骨折や歯を防御するヘッドギヤを付ける日が来れば、フットボール選手たちは、安全にプレイできるだろう、と語った。

その時までには11月になつていて、ヴァージニア大学の秋の学期に入るには間に合わなかつた。以前の仕事で得た貯金は、ほとんど使い果たしていたので、販売の仕事を見つけるまで3日間、私はウィルクス・バーとスクラントン新聞で適した仕事があるか、求人広告を探した。私が応募した仕事は、まだ求人を受け付けていて、私は直ちにシェフ、ウェイター、レジ、そして雑役係を兼務するためにウィルクス・バー・ユニオン駅の深夜勤務のレストランに働きに行つた。

十分なレストランの給料が貰えるだけでなく、私はハムステーキ、ソーセージエッグ、アップルソース、クールスロー、デンマークペーストリー、チョコレートパイに加えて、照りのあるドーナツなどすべてを、夜11時から次の朝6時までの間は、食べ放題という特権もあつた。2週間後、怪我をしていた私の鼻は、わずかに片方に傾いていたが治り始めた。そして私はほとんど10ポンドも体重が増して、それは重量級の無煙炭の鉱夫たちと共に、リーグ戦にプロ・フットボール選手として出場できる位であった。

1925年の元旦、私はシャーロットヴィルへ向かう途中だった。2、3日後はヴァージニア大学の新学期に登録を済ませて、玉突き場での夜のバイトを再開することが可能であった。給料はまだ同じで、一晩に1ドルであった。

私は自分のとった進路に満足していたし、学生部長からも教授たちからも何の反対の意見も受けなかつた。それから初めの2、3週後、私はヘレン・ラニガンという魅力的なブロンドの院生に出会つた。彼女の年は私と同じで、すぐに友好的な関係へと発展していった。その結果、3月のある朝、私たちがワシントンD.C.行きの列車に乗り、その日のうちに結婚してしまうような間柄となるまで、そんなに長い期間はかからなかつた。それから、私たちは、夜行列車に乗り、シャーロットヴィルに戻ってきた。

ヘレンと私は授業を受け続け、そしてこの上なく幸せで、心配事もない何週間が過ぎてしまふまでは、私たちの結婚はすべてうまくいっていた。その時、私は自分のUDCの奨学金と、一晩に1ドルの稼ぎでは、結婚した2人の家計を支えるには十分でないと分かり、愕然とした。金銭の不安と経済的安定について、深刻に心配した私は、大学を退めてフルタイムで働く仕事を探そうと決心するにいたつた。

そのことを決意して数日後に、私はヴァージニア州からジョージア州への列車に乗り、アトランタ・ジャーナル紙の記者としての仕事に応募した。

私は、小さな町の通信員としての私の経験以外の、主要な日刊新聞の記者になるための、何の資格も持たなかつたが、運と熱心な顔つきのおかげで私は雇われ、一週間に20ドルの給料の正社員として配属された。

私の見習い新聞記者としての初めての任務は、毎日の死亡記事を書くことだった。それから数週間後、社会部の編集長が、私にインタビューや、殺人犯特集記事も担当してほしいと言つてきた。そして私は夜遅くまで、ヘレンと私が借りていた家財道具もまばらなアパートで、深夜まで短編小説を書いていた。仕事は生活していくために必要だとみなされるだろうが、それとても小説家になりたいという、抑えられない欲望ほど重要ではなかつた。

暇な時間に私は、キャロライナ州のシャーロットの新聞に書評を書き始めていた。シャーロッ

ト・オブザーバー紙の評論欄の編集者は、私に毎週新刊の小説やノンフィクションの本を10冊から15冊快く送ってくれ、原稿料の代わりに、私はそれらの本を自分の書物とすることが許された。最初、私は新刊書の数冊を古本屋に、それぞれ25セントで売った。しかし、後で私は将来、それらのうまい使い道があるかもしれないと考えて、大きなダンボール箱にしまって置きはじめた。

ヘレンと私が結婚して3年もたたないうちに、私たちはメイン州のマウント・バーノンの農家に住み、そして2人の息子の親となった。私は、たとえ私の給料が週に25ドルに昇給しても、アトランタ・ジャーナルの仕事を辞めていた。私が新聞から離れたのは、私は十分な時間をかけて、すべて小説を書くことに専念しなければならない、と思っていたからだ。原稿料の有無を問わずに、私はまだ、ただ一つの私の短編小説さえも、雑誌の掲載作品として採用されていなかった。それにもかかわらず、私は手法を改善し続けようと決心していたので、初期の失敗で落胆することはなかった。私は作品を書くことに精進し、1年もしくは7年もかかろうとも、私の作品が出版されるのを待つ心の準備ができていた。

メイン州を場所として選んだ重要な理由のひとつは、深南部での生活の環境と情景の、別の視界を開けるように、できるだけはるか遠くに行きたかったからだ。それから、農場やその建物の管理人として、私はじゃがいもや、カブハボタンなどの食物を栽培することができたし、暖房のため熱心に薪を割った。残りの時間は、短編小説や中編小説を書くために充てられた。そして、書評を書くのにも充てられた。その時までに、私は毎週、書評のために新刊書を50冊も受け取っていた。その中のほんの12冊ほどの書評をするのだが、私は古本屋へ売りに出すために、あるいはその他の偶発的な利用のために数百冊という本を蓄えていた。

この期間の間、雑誌編集者は私の作品を拒否していたので、郵便配達の時間に、原稿の返送を静かに待つのが日課となっていた。これは、私が出版される作家になろうと努めた結果としての試練であって、十分な我慢強さと元気を生み出すために、自分自身に課した厳しい試練だった。それぞれの拒否の後、雑誌編集者や本の編集者が、私の仕事に十分な真価を見つけ、私に投げかけられた陰うつな時期が破られるまで待とう、と今まで以上に決心した。

この時期は、作家としての成功の見込は皆無であり、これ以上精進を続けていく自信を喪失してしまい、自信回復の見込はなく、多分、永久に落ち込んでしまうかもしれない、と感じていた人生の一時期であった。もし私が、作家としての成功の尺度を、物語の紡ぎ手としての卓越した技巧を追求するという私自身の基準ではなく、作家として稼ぐ金額の総計を私の成功の理念として考えていたのであれば、私は自ら好んで職業作家として立つことを、永久に放棄する立派な理由を持つことになっただろう。このような姿勢を堅持する過程で、私は金のために書く作家ではなく、これと反対に、金をもらえる価値のある作品を生み出す作家になろうという信念を持つにいたった。これは、私が以前に考え出した創作プロットや結末にそって展開する短編や小説は決して書かない、という姿勢につながるものである。私が短編や小説を執筆中、必然的な関心事は、物語の始まりから結末にいたるまで、次に何が起こるかということなのである。結果的には、私は十分な報酬目当ての作品を書くことはできなかった。

このように希望を遂げられない長期間の後、私は活字となって出版された、私の最初の短編小説を見て驚き、その上、雑誌の一冊と共に、編集者からの手紙が同封されているのを見て、予期せぬことでびっくり仰天してしまった。すべてこれは、見慣れない外国のスタンプを貼っ

て、大型封筒にて送達されて来たのであった。

私が受け取ったものは、「トランジション」誌が発行した、パリで出版されている英文雑誌であった。そして、私が将来、私の短編小説をもっと提供して欲しい、と私に通知して来た手紙が添えられていた。また、小さな出版元であるので、小社は出版された作品に対して、ほとんど報酬を提供できないのも現実である、とも書かれてあった。

その年の残りから翌年にかけて、何編かの短編が受理されて、アメリカ合衆国の中規模の雑誌に発表された。長いこと報酬は受け取らなかったけれど、25歳の誕生日を迎える頃までには、より大きな購読層を持つ雑誌のいくつかから、雀の涙ほどの稿料を受け取りはじめた。2編の中間小説が受理されて、限定出版という形で、出版予定に加えられた。1年後、大手の出版社が『短編集』⁽⁵⁾を一冊を出版してくれた。

メイン州のポートランドで、ヘレンと私が、小さくて目立たない本屋を開店したのは、この時期のことである。多年にわたって書評本として送付されてきた書籍が、積もり積もって数千冊にもにのぼっていたが、これを元手にしたのであった。しかし、警察が私の処女作である短編小説のすべての在庫本を没収してしまった時に、書店として商売を存続できるか、疑わしい状態となった。そしてその後、書店の存続は、最新のベストセラー作品を、確立された信用の不足のために出版社に発注できなくなった時、終わりを告げた。最後には、書店は完全に倒産し、その結果私は、プロの作家として作品を書いたり、改作したりする私の好きな仕事に、以前よりも増した決意でもって、仕事に専ら専念する幸運に恵まれた。

私の最初の長編小説、『タバコ・ロード』⁽⁶⁾は、私が29歳になった、1932年に出版された。この小説に、いくつかの好意的な評論が寄せられたものの、印税は多くなく、ハリウッドでの若いシナリオライターとしての仕事の申し出を、断るわけにはいかないと決心した。私は食べ物や着る物、そして医療費のための金は、ヘレンと2人の子供の幸福のために必要である、という事実によって動機づけられた。私がハリウッドへ到着した後に、メイン州で娘が誕生し、この判断は正しかったことが確認された。

私の3ヵ月間のシナリオ書きのために割り当てられた仕事は、6ヵ月間に延長され、私は短期間の生活費には、充分な金を蓄えて、マウント・バーノンへ戻った。『タバコ・ロード』の批評は必ずしも好意的なものというわけでもなく、またジャック・カークランドによる小説の脚本化も、当初は注目を浴びなかった。私はこの小説を信じない人々のために、写真によって事実を証明してくれる、しかるべき写真家を捜そうと決心した。大恐慌期の社会的・経済的な困窮を、写真に私の文章を添えて、描写しようという私の提案は、すぐにマーガレット・パーク=ホワイトの心を動かした。

1936年、私たちの共同制作は、数週間にも及んだ。そして、『あなたは彼らの顔を見た』⁽⁷⁾は、1937年に出版された。その書物は、その目的にかなっているばかりでなく、充分に有効的な仕事であり、その後に出版される〈写真-テキスト〉版の書物の発刊の効果的な方法を確立した。私たちの次の共同制作は、第二次世界大戦の勃発直前、チェコスロバキアでの人生模様の研究で、『ドナウ川の北』⁽⁸⁾という作品であった。そして、それに続いて私たちは、アメリカ合衆国を広く旅をし、そして、『まあ、これがアメリカか?』⁽⁹⁾を共同制作した。

国内と海外の両方を旅行すると同時に、短編物語と小説を書き続けた数年後、私はコネチカット州のダリエンに家を建てようと決心した。この決心は、ヘレンの心に訴えかけられなかった。彼女は、メイン州に住み続けることを決めていて、離婚がこれに続いた。ダリエンへ移って間

もなく、マーガレット・バーク=ホワイトと私は結婚した。

数年後の1941年、互いの仕事のための旅行で、長く別れて暮らした後、マーガレットと私はすべて他のことはしばらく考慮に入れず、数ヵ月ソビエト連邦に旅行に行くことを取り決めた。第二次世界大戦の勃発に先立つドイツ軍によるソビエト連邦への侵行は、すぐに拡大して、私たちは、中国経由でモスクワへ入る以外は可能性がない、と理解した。私たちが計画を立てた旅程は、地図の上では簡単で、しかも筋が通っているように思われた。しかしそれは、現実には強要される我慢と、人間の耐久性を試される旅となった。

私たちはカリフォルニアから香港まで、「チャイナ・クリッパー機」という飛行艇に乗って旅立つことで、モスクワへの旅が始まった。それは大型帆船よりも確かに早かった。それにしても、グアムとフィリピンの近くでの台風や、台風の前兆による遅れが、ほとんど毎日のように起きて、旅は11日間を要した。

香港に到着した後、私たちは通過査証を、重慶の蒋介石政府から入手することができるまでは、何週間も待たされた。ビザが発行された後、月の出ないある真夜中の暗闇の中を、私たち6人の乗客を乗せた複葉機は、香港を離陸して、夜明けには重慶に無事に到着した。しかし、日本の占領軍の戦闘機から、4時間も巧みに回避して旅行した後、びくびく脅えながら着地したのであった。

12日後、ソビエト連邦への入国のために、私たちのアメリカ・パスポートのビザにスタンプを押してもらい、そしてサイレンがけたたましく鳴り、私たちは毎日のように、防空壕や塹壕に生命がけで、駆け込む必要性から解放されて、ホッとした気持ちになった。日本の戦闘機は、きまって正午に飛来して、爆撃する時は、重慶の茶屋の屋根の上をすれすれに飛び、轟音を響かせたからである。

マーガレットと私がモスクワに着いた2週間後、ドイツとロシアの戦争が勃発した。そして、つぎの3ヵ月間、私たちはそこで生活し、そして正午の重慶が日本軍によって爆撃されたよりも、非常に長く厳しい焼夷弾の爆撃を毎晩ぐり抜けて働いた。マーガレットは絶えず、「ライフ」誌のために写真撮影に専念した。特にクレムリンに毎晩投下される焼夷弾の撮影をした。一方、私はコロンビア放送局の通信員として、アメリカへ向けての夜のラジオ放送をするために、昼のうちに戦争のニュースを集めた。ドイツとロシアの戦争は続いたが、アメリカ合衆国へ戻る決意をしたのは、家を離れてからほとんど6ヵ月後であった。私たちは、再び中国経由の長いルートを取る代わりに、スコットランド経由で英国の護送艦で戻ることが可能であると分かった。私たちの食事用として、パン、ソーセージそして水筒を持って、モスクワから列車に乗り込んだ。2日2晩の旅の後、私たちの窮屈な客車は、パレンツ海のアルハンゲルスクに着いた。私たちの乗ったイギリスの貨物船は、アフリカの熱帯沿岸航行用に建造された船で、氷山が浮かぶ海を航行できるように改造はしてはあるものの、暖房の設備はなかった。

1週間後、護衛艦団はスコットランドに着き、すぐに私たちはポルトガルへ向けてイギリスの郵便機に搭乗する手はずになっていた。やがて、私たちの乗る水陸両用飛行機がドイツ軍の戦闘機の封鎖網をかいくぐって飛行できるように、月のない夜を少々忍耐強く待った後、私たちはアゾレス諸島とバミューダ経由で、ニューヨークへ向かってリスボンを出発した。日本軍がパール・ハーバーを爆撃した時、私たちは唯一短い時間をコネチカット州の我が家で過ごしたのであった。

2ヵ月後、徴兵に登録した後、私はハリウッドへ向けて出発した。ハリウッドでモスクワを

舞台とした映画制作に参加するのも、戦時下の私の愛国心の発露であるという気持ちからであった。私はマーガレットが、カリフォルニアでは私と一緒に暮らしたくないと言い残して、写真の仕事のためにヨーロッパに去ってしまい、彼女と離れて暮らすのはみじめであった。そして私はジョセフ・スター・リンの栄光のためのプロパガンダ映画の制作に手を染めている自分に気づき、心を悩まされた。私は高い給料を放棄したいとは思わなかったし、これとは別に、私は6ヵ月間、シナリオライターとしての仕事の契約を果たす義務があると感じた。幸運にも、私は別のフィルムの契約を得ることができた。

6ヵ月間の契約完了後、私はコネチカットへ戻る気持ちはなくなっていた。マーガレットは再び外国へ行ったが、今度は彼女は北アフリカへ行った。そして彼女は2度と西部に住むなんて考えたくないと言った。私はハリウッドを去って、アリゾナ州、トゥーソンに直行して、数か月前は見たこともなかった家を買った。

室内装飾家による、完全な家具付きのトゥーソンの新しい家は、すぐに私の気に入り、そして砂漠気候は、霧やスモッグの南カリフォルニアのそれとは変わっていて、私を楽しませた。そしてもっとも良いことは、映画スタジオではなくて、私の満足のいくまで、執筆活動に勤しむ自由と機会に恵まれた。そして私はより多種の執筆をこなすことができると感じた。何よりもまず、私は1943年に出版された『ジョージア・ボーイ』⁽¹⁰⁾の構成に関係のある物語の執筆を終えた。そして次に、1944年に発表した『悲劇の土地』⁽¹¹⁾という小説を書き始めた。

この期間、マーガレットの協力により、私は執筆の時間をほとんど浪費することなく、メキシコでの離婚を認めた。離婚判決は週末に3回、トゥーソンからモレロス州へ飛行機で旅をすることで、あっさりとけりがついた。

以来、私が40歳になった年の終わり近くまで、私の私生活に邪魔がほとんど入らない時期であった。邪魔が入ったのは、私がアリゾナ大学の学生だったジューン・ジョソソンと邂逅した時であった。そして私たちは、お互いを知ってから、とても短期間で結婚した。結婚するとすぐに私たちは、私がその年書き終えた本の2冊分の原稿を携えてニューヨークへ向かった。原稿は12月後半の雲の降る朝に出版社へ届けられた。

1943年の到来とともに、私はもう一度ハリウッドの呼び出しの圧力に抵抗できなかった。呼び出しは、熱心に、しつこく、私の代理人であるアル・マニュエルによってなされた。そしてそれは、結婚後間もないことで、ジューンと私は、ハリウッドとトゥーソンとを交互に住み分けながら1年を送った。

これは落ち着かない旅に明け暮れる、次の10年間の始まりであり、そしていつもポータブル・タイプライターを携行していた。私の3番目の息子が生まれてしばらくの間、私は一人でアメリカ合衆国を旅したが、間もなく1年の初めから次の年まで、アリゾナの私の家に落ち着いて、自作の推敲を重ねることが可能であろうと確信していた。

かなり説得した後、短期であるが私は、ジューンをメキシコ、キューバ、南アメリカ、そしてヨーロッパへの旅行に連れ出したことがある。けれども後に、彼女はアメリカ合衆国であれ、外国であれ、私と旅に出ることを、断固として拒否するようになった。ある精神科医の患者として、トゥーソンに留まりたいというジューンの強固な希望に、できる限りの同情を示したいと努力はしたが、地平線の彼方の生活を観察し、あれこれ考え、そしてこれに参加したいという私の生得の願望をあえて断念したり、放棄したくはなかった。

この期間の数年間、私は『アメリカの習俗』⁽¹²⁾という共通のタイトルで25冊の双書の企画編集を手がけていた。このシリーズでは、各地域に住む選り抜きの著者から執筆を担当してもらう手はずになっていた。初期に出版予定の書物には『砂漠地帯』⁽¹³⁾や『パルメットー地域』⁽¹⁴⁾などが含まれていた。

この数年間、私はアメリカ合衆国のさまざまな地域に向けて、たびたび旅立った。自分の故郷の人々の文化や習俗を描き、かつ評価してくれる有能な著作者を求めて、たび重なる旅行にもかかわらず、当時は数多くの短編と年1冊の小説を完成するといいつものペースを堅持した。私は制限は設定してなく、究極の目標も別に心に定めていなかったが、後年になって50冊の著作と、150編の短編小説の作家となれば、満足のいく数であろうと心に決めた。

おそらく落ち着きのない、変化と旅を求める性癖のせいであろう、トゥーソンに住居を構えてから、4度、住む家を変えた。過去においても例のあることだが、4回の転居に続いて、トゥーソン以外の土地に住みたい、という切迫した必要性を感じた。

私の身辺に徐々に起こったことは、自分の創作のプライバシーはなくなり、邪魔者によって中断されることが、以前にもまして、頻繁になってきたということである。同じ都市内の第5番目の場所に引っ越しするのは、単に一時凌ぎの姑息な手段であると悟り、私はトゥーソンを去って、他の都市で、プライバシーの場所を見つけなければならないだろうと決心した。非常に多くの人口があり、隣の人間の侵害もなく、それ程遠くもない都市であるフェニックスで、新しい家に落ち着くことは、私にとって論理にかなった計画であるように思われた。しかしながら、この移住がアリゾナ州の境界を越えた転住ではないにしても、ジューンはトゥーソンに留まり、彼女のお気に入りの専門医にかかり続けたい、と宣言した。私はフェニックスに転居し、間もなく離婚がこれに伴ったことは、当然の結果だった。

私が、フェニックスの北部の一区画の長く定着した土地で、大きな木陰のある敷地に、中位の大きさの切妻屋根の近代的な家を買ったのは、1950年代の初期のことであった。スイミングプールと、幅広くキョウチクトウとバラが植え込まれていることに加えて、建物には、書き物をしたり、静かに休むための理想的に切り離された場所を提供する、3部屋付きのゲスト・ハウスがあった。私は、新しい住まいと、私の仕事部屋がとても気にいったので、フェニックスでの最初6ヵ月間は、唯一私が繁華街のバーやクラブで友人に会った時以外は、めったに家を離れることはなかった。この隔離したような生活は、その早い時期と、そして再び、後ではアメリカ合衆国内やヨーロッパ旅行に充てない時期に生じた。

生活が並外れて楽しくなり、生活ぶりが決まりきって快適であった時、私にとっては、日に統いて夜が訪れるように、再び生活の場所を変える時が来たと気づいていた。

町の範囲内で、あるいは大陸を横切って、あちらこちらに転住する行為は、その頃までには、明らかにやむにやまれぬ習慣となってしまったのだが、圧倒的な衝動に促されて環境の変化を求める時、いつでも平穏な心を生み出すことを、考慮に入れることができた。

そして、今度は、私は筋道を立ててあれこれ考え直す暇もなく、私は快適な私の住居を売りに出して、フェニックスを発ってサンフランシスコへ向かったのだった。ところで、なぜサンフランシスコなのか、というのは、私が過去何度もその都市を訪問していて、サンフランシスコを、離れた所にある都市として覚えていて、私を蠱惑的に招いている所だという以外の他の理由はなかった。

1956年に、サンフランシスコに着いた時、私は心の中に醸し出された、いくつかの短編小説

を書きたくてうずうずしていた。さらに、私は最近小説を一編書き終えたばかりなのに、心の中で新しい小説の構想ができ上がって、早く書け、と私を駆り立て、急がせていた。書き始めることができる前に、私は住まいと仕事にふさわしい適切な場所を探した。

実は、私がサンフランシスコに着いた後、意気揚々としていた原因の一つは、フェニックスで私の人生で初めて、私は配偶者の財産配分を確定する際に、私の家を自分で保有できたという事実だった。私は、以前、マウント・ヴァーノンの家はヘレンに、そして、ダーリエンの家はマーガレットに与えていた。トゥーソンでは、ジューンは、夫婦共有財産の処理合意に当たって、価値あるエーカー当たりの宅地と、家の売却からの現金を受け取っていた。恐らく、過去の経験から私の心の中にはっきりと、サンフランシスコでは家を買わず、代わりに住むのに快適な場所を借りようと決心していた。

私が引っ越した家は、大きく、幅の広い窓があり、三階建てで、ツイン・ピークスの急な北斜面に立つ家であった。180度の光景を、一望できるように設計されていて、金門橋、エンパルカデロ、サンフランシスコ湾、そしてオークランドの風景は昼も夜も壮大だった。そして、太平洋から霧がしだいに近づいて来て、ビルや街灯や街の喧騒を覆い隠す時でさえ、金門橋の塔の高さからの光景や、テレグラフ・ヒルのきらめく明りや、ラッシュ・ヒルの頂上のペイント・ハウスは常に視界に飛び込んできた。

魅力のある若い女性、ヴァージニア・モフェット・フレッチャーが、私の人生へ再びやって来たのは、この時点だった。私は、風景画家であるヴァージニアに、ボルチモアでの出版社の夕食会で、数年前に会っていた。そして、私たちの友好関係は、結婚を考える程度にまで成長していた。そして、1957年1月1日に、私たちは結婚した。この出来事の後、ヴァージニアは私の編集上の助手になり、以前はミルドレン・ジン、マーガレット・ソルター、ポリー・ストールスミスそしてペティー・パスターファイのような、熟達した秘書によって処理されていた仕事を、彼女が引き継いだ。

ネバダ州のレノでの、私たちの大晦日の真夜中の結婚式の直後、ヴァージニアと私は、クイーン・メアリー号でヨーロッパへ旅立った。パリの1月は寒く、雪が降っていて、私たちは自動車旅行でフロリダの暖かさへ戻って来たことが嬉しかった。

ハリウッドの私の代理人アル・マニュエルが、『神の小さな土地』⁽¹⁵⁾という小説の独立した映画制作をアレンジしている間に、この旅行をした。映画の権利のパートナーとして、私たちはスタジオ・コントロールについては独立していて、完全に自由に映画制作ができたので、私はその協定に関しては嬉しかった。ハッピー・エンディングによる、ひどく歪められた『タバコ・ロード』の映画化のことを私は喜んではいなかった。

私たちの車での、フロリダからカリフォルニアへの旅行の道中で、私たちは映画制作のための、最終的な詳細な計画の完成を祝う動機を持った。これはテキサス州のアルパインで小さな食料雑貨店のバック・ルームで、2時間の電話協議のさい中に起こった。公衆電話の短気な管理人は、食料雑貨店のオーナーも兼ねていて、彼女は断固として、自分の店内でビールやウイスキーを飲むことは、まったく我慢ならないと告げた。

アル・マニュエルと私のパートナーたちとの2時間の協議の中途に、ハリウッドでの財政的な詳細な計画協定を、快く祝うことを持ちながら、ヴァージニアは、食料雑貨店のオーナーから2瓶のコカコーラを買い、気づかれずになんとか、ソフトドリンクの大半を地面に流そうとした。私の開いたブリーフケースの背後で、厳しい表情のテキサス女性が丸見えの所で、バー

ボンウイスキーのボトルから2本の瓶に、酒を注ぎ込んだ。これに次ぐ1時間は、私たちは電話で話すのと、ユーラの瓶から酒を飲むのを交互のやりながら、満足して祝福し合っていた。この間にも、バーボンの鼻を強く刺激する臭いが、部屋を横切って空中を漂っていたので、公衆電話の所有者の怒りをかうのではないかと時々思った。私たちが出発する時、例の仏頂面のテキサス女は、疑わしげに鼻でくんくん臭いをかぎながら、荒々しく窓を全部開け放って、両手で空気を扇いでいた。

数週間後に、『神の小さな土地』の映画化が決定し、ジョージア州はオーガスタの近郊の小説の舞台と同じ場所で、クランクインする手はずが整った。農場や綿花工場の舞台も設定された後、「綿花工場主に反抗して、労働者がストライキを打つのに、批判的でない小説の映画化は、容認できない」とする当該の綿花ビジネスや政治的思惑によって、計画は頓挫した。

計画はジョージア州で2週間ほど遅延した後、再び適当なロケーションの場所探し始まった。数週間後に、カリフォルニア州のストックトンで、ロケの場所は見つかった。キャステンゲが決定し、撮影機器がハリウッドからストックトンに搬送されしだい、映画の撮影が始まった。1年以内に、フィルムの編集を終えて、最初のロードショウの封切りは、イタリアのベニス映画祭においてであった。ヴァージニアと私は、ベニスのリドの開祭式に出席するように求められ、すぐこれを受諾した。

3年間もツイン・ピークスの頂上で穏やかに暮らした後に、サンフランシスコの繁華街に、賃貸契約の蕭条なタウンハウスが見つかった。その家は貸しに出ていて、未だ住民が定まっていないということであった。私がもし転居の理由を話すように求められれば、その時までには、素晴らしい眺望や隔離から変化を求めて、チャイナタウン、ノースビーチ、ノブヒル、ユニオンスクエア、テンダーロイン街、そしてその他のサンフランシスコの繁華街の、特徴ある界隈の光景や騒音や独特的の雰囲気と、親しく交わりたいという必要性を感じたからである、と返答したであろう。

ヴァージニアと私は都会に住んで、旅行に出ない時は、日中は著作に励み、夕方になると私たちは、しばしば地下のナイトクラブの一幕物や、ミュージックホールの幕間劇を観たりして、中断しながらも、何の屈託もなく、はしご酒をして歩いたものであった。そして私たちの徘徊は、ノースビーチカフェや、ユニオンスクエアのディビッドの店でのシェフのカウンターで、真夜中のスナックでいつもは終りを告げるのであった。

私たちが旅行している時には、ヨーロッパの翻訳家や出版社、そして友だちを訪問するのがふつうであった。威厳ある北大西洋航路の旅客船は、すべての栄光を掲げて航行していて、私たちは毎年クイーン・メアリー号やリバティ号、またはフランス号といった船に乗って渡航していた。

しかしながら、船で外国へ旅行するか、飛行機で外国へ行くか、そしてヨーロッパへ行くかアジアへ行くか、どこに旅行するにせよ、私は家へ帰って、楽しそうに座りながら、自分のタイプライターを叩くことができるまで、私は短編小説とか小説とかをいつも心の中で描きながら、数週間から数日の過ぎるのを数えていた。

小説を書く必要性は、私にとって空腹で食べ物が欲しいことと同様に、やむにやまれない衝動であった。つむじ曲りの運命によって、心象風景を現実に紙面にインクで移すことの可能性が妨げられると、身体の悩みと、心の鋭いフラストレーションを引き起こしそうであった。いろいろな場面やテーマは、人々の数えきれない表情とともに、最初に思い出されるか、あるいは

は過去から呼び戻されるかの、どちらか一方であるのだが、主題を次々に除去していって、最後に書きたいという、好ましい選択ができるような秩序が確立するまでは、全体の混乱を引き起こされるものだと予期していた。私は、アイデアやふさわしい題材が欠落しているために、物語や小説を書くことができなかつたことは一度もなかつた。私はまったく怠惰であり、別の活動を好んだ時期もあったが、そのときでさえ、これから私が将来使うために、自分の考えや印象を常に注意深く蓄えていた。

これらの年月の間に、私はいくつかの小説を完結することができた。これらの3つの作品の題名は、『ジェニー・バイ・ネイチャー』⁽¹⁶⁾ (1961)、『故郷の近く』⁽¹⁷⁾ (1962)、そして『夏の終わりの夜』⁽¹⁸⁾ (1963) であった。またこの時期は、ヴァージニアと私が、私の文章と、彼女のペンとインクで描いた挿絵の入った1冊の本を、共作した期間でもあった。私たちは、テキストの題材を集めることや、挿絵のスケッチをするために1963年に取材旅行に出た。そして『アラウンド・アバウト・アメリカ』⁽¹⁹⁾ というタイトルで1964年に出版された。

私が62歳近くになった1965年になると、私の人生は2、3年ごとに生活の場所を変えて、作家として、旅人としての生活を送るように運命づけられている、という結論に達した。おそらくこれは、私の長老派教会会員の素晴らしい両親の恩恵によるものであろう。作家や旅人と同様に、自分自身を証明することは簡単である。2、3の原稿のページや、数枚の旅行領収証が証明となってくれるから。だが私の運命を完結するためには、何度も何度も、まだまだ転住する必要があった。そして私は実際にそうした。

サンフランシスコでの心地好い町の邸宅を去って、ヴァージニアと私は、オリンダとウォールナット川近くにある起伏する緑に覆われた丘で、オークランドの東とパークレーの中間に位置する新築の家を買った。そして、私たちの所持品を備え、ヨーロッパへの旅行のために準備している時に、私はアメリカ文化情報局のボランティア・スピーカーになる任務を与えられ、喜んでこれを受けた。文化情報局とは、アメリカ国務省の一部門であり、「アメリカ合衆国情報サービス」のタイトルのもとに、世界の各地の数多くの部署において活動を展開していた。報酬は政府の支給する普通の一日の日当であった。

U.S.I.S.⁽²⁰⁾の任務で何回かした旅で、東ヨーロッパと西ヨーロッパの全ての国を訪れたが、その間にいくつかの些細な災難があった。それは、プラハで足首を捻挫したことや、ヘルシンキで凍傷にかかったりしたことだが、ブカレストからモスクワまでの飛行中の機内で起こった出来事が、重大なものだったかもしれない。それは、真夜中に私のしでかした出来事で、古めかしいルーマニアの飛行機が、今にも炎上して墜落するのではないかと、長いこと恐怖におののいていた。

通常、キャビン・チュワーデスは飛行機の後ろのブースに立ち、ビールやミネラルウォーターをボトルで売っている。彼女は、他に何かすることは要求されていない。私が欠陥のあるシートを直すのを彼女に頼んだら、怒って首を振って断られた時に、このことは明らかになった。このような事の顛末の末、私は煙草に火をつけた。

少し経ってから、私は窓の下の灰皿だと思っていたものに、吸いかけの煙草を押し込んだ。灰皿などではなかった。そうではなくて、それは飛行機のキャビンの、防音用の詰め物の割れ目や裂け目で、見えない所から立ちのぼる煙で、それが燃えていることを示していた。私は裂け目に新聞を詰めて、火を消そうとしたが、全然効果がなく、縁がかったもやが天井に向かって波のように大きくうねり始めた。ひどく逆上して、チュワーデスを呼んだのだが、少しも

助けてくれようとはしなかった。そのかわり、彼女はかたくなに頭を振り、売店を離れることを拒んだ。私は死に物狂いで彼女のところへ行き、大急ぎで大きいミネラルウォーターのボトルを買った。幸運にも水をたっぷりかけたので、火はすぐに消えた。スチュワーデスは、私にボトルが空になったら、すぐにそれを返すように指示した。私は言うとおりに返したが、2人とも無言のままであった。

1970年に入り、3年間で5冊の本を書き、U.S.I.S.のための3回にわたるヨーロッパの旅を終え（あと2回残っていたが）、私たちはまたカリフォルニア州オリンダからフロリダ州のダンイーデンへ引っ越しをした。さらに毎年、4～5週間の期間で、アメリカ合衆国での4回の講演ツアーに参加する契約を、講演代理業者と結んだ。

私はすぐに、国内各地を講演して廻ることは、そのオーナたちは年季奉公契約で人を働かせることで、金銭上の成功を修めたのだが、私にとっては、すべての様々な経験の中で、最も肉体的に疲労し、精神的に耐えがたいものであるということに、すぐに気づくことになった。これは、まるで元炭鉱夫たちと一緒にセミプロのフットボール試合をしたり、大学の微積分学の試験を競ったりした経験の部類に入るものであった。

1965年2月1日の夕方に、アメリカ合衆国で、私が初めてのプロの講演契約による講演を行ったのは、国会図書館内の会場であったのだが、おぼつかない演説になってしまった。この講演料は、ホワイトホール詩歌と文学協会によって支給されていた。そして予定された講演の2、3時間前に、不運にもワシントンのラジオ局が、差し迫っている大吹雪警報を放送し、住民はその夜は外出しないように警告された。ほんの何人かの人たちが、その吹雪警報を無視して出席したが、まばらな聴衆となっていた。しかしながら、事後になって私に説明されたことだが、講演の目的は、多くの聴衆の前に私が姿を見せることではなく、私の講演を、国会図書館の公文書館の記録文書のために、録音することであった。

講演巡業の講師の仲間入りして、手ほどきを受けると、私はすぐに講演壇上でくつろいだ気分になれた。講演者としての短い期間の仕事を終えた頃には、すでにアラスカのフェアバンクスからプエルトリコのサンファンまで、そしてボストンからロサンゼルスまでの72校ものカレッジや大学を訪れていた。それぞれの契約は、一晩のみの講演であった。私がキャンパスの大学生たちと多少とも知り合うようになった唯一の機会は、ダートマス大学にて、ライター・イン・レジデンス（学内居住作家）として一ヵ月間その大学に滞在した時であった。

小さなカレッジであれ、大きな大学であれどちらででも、学生たちからの最も多かった質問は、答えるのがとても難しかったので、母方の祖母が私に何度も教えてくれた忠告を引用して、これに答えなければならなかった。ある学生に、「作家になるために、学ぶべき一番の方法はなんですか？」と聞かれた時、私は次の祖母の言葉を引用したものであった。「千草の山の中に落ちた針を探すのに、一番良い方法はなんですか？もちろん、探すことです。」

しかしながら、大真面目な質問に対しては、軽薄な解答は明らかに不必要で、避けるべきである。そういう場合は、講演の後、夕方遅く何人か興味を持った学生たちが、それぞれビールを持って集まり、文章作成法についての適切な勉強法や作業について、十分に時間をかけて討論をしたのである。格式ばらずに、私は職業作家として、書くことについての私の個人的信念を話すことができた。

私が考えたり、討議するために学生グループに提案したことは、目標を達成するために私が

考慮に入れた、必要な4つの要素について、意見を述べてもらうことであった。これらの要素とは、重要な順に並べれば、才能、願望、決意、そして運である。これらの諸要素は、めったにない組み合わせで、簡単には擁護できるものではないと思う。しかしこの提案は、現実的であるし、よく考えてみる価値はあるものと思う。

私のフロリダ西海岸への転住の理由は、「私は気腫にひどく悩まされていて、私が直ちに亜熱帯気候へ移り、毎日欠かさず泳ぐことによってのみ、私の苦痛を軽減することができる」と主張したサンフランシスコのある医者によって、そそのかされたものだった。冷たくそしてしばしば霧の深いオリンダでは、屋外で泳ぐことは実行できなかった。だから私たちは、プール付きの家を購入するため、はるばるフロリダまでやって来たのだ。2、3ヵ月後、フロリダで評判の良い専門医から、私の病気は、普通の慢性気管支炎だと知らされた。

不用なプールまで入手することになった誤診のたぐいは、これひとつではなかった。サンフランシスコから移住する前、別の皮膚科医は、私が乾癬にかかっていて、私にとっては、アリゾナ州ユマへ行き、そして午前中の遅い時間帯に2時間、昼過ぎに2時間、毎日日光浴することが唯一の有効的治療法である、と力強く宣告した。

この療法は1週間と処方され、しかもその週は、8月の水ぶくれにかかるような週であった。私がサンフランシスコに戻った時、また他の皮膚科医が、私の痛めた皮膚を一目診ると、その医者は、私の病気は乾癬のようなものでは全然なくて、私が太陽の直射光線によるアレルギーをおこしていると言った。彼は直ちに私の9個の皮膚癌を、外科手術で剔出してもらうために、私を病院に送り込んだ。

この時期、1969年に出版された、『避難小屋』⁽²¹⁾という最新作の次にくる小説を書き始める前に、ヴァージニアと私は、世界を回る6週間の旅に出るためにフロリダを離れ、西方へ行く代わりに東方への私の初めての旅程の途についた。私たちの目的地は日本で、私が京都や東京の諸大学でU.S.I.S.のために講演をする予定であった。私たちは途中で、パリ、ローマ、ペイント、カラチ、カルカッタ、ラングーン、バンコクそして香港の翻訳者や出版業者と会合を持つために、各地に立ち寄った。長い旅行の間、予期せぬ出来事が、東京の芸者家の遇てなしの際に起った。

その当惑した状況は、当地のご馳走を盛り込んだ、ゆったりした晚餐会に続く真夜中に起こった。それは、2人の芸者が見るもの恐ろしい、この世のものとも思えぬ楽器を持って奏でる、エキゾチックな音楽に、私は突然打ちのめされたという格好であった。ヴァージニアと私たちの通訳の両方とも、ひとりの芸者に、扇であおいでもらっている間、私は目を閉じて、涼しげな畳の上に、仰向けに横たわる必要があるという意見であった。そしてそれは、遅い時間、疲労、耳をつんざくような音楽、見慣れない芸者の風習、魅惑的な環境、そして爛とした日本酒の飲み過ぎなどが相乗効果となって、私を昏睡状態に陥らせた、というのが2人の結論であった。畳の上で30分も横になった後、さらに爛酒がすすめられ、酒盃は受けたが、私はこれ以上芸者の音楽はけっこうです、と断った。

1971年11月に、アメリカ合衆国に帰ってきた後、私は執筆中の小説に専念して、それは6ヵ月後に完成された、その本のタイトルは、『アネット』⁽²²⁾であり、そしてそれは、次の年に出版された。

小説を書き終えた後2、3日後、ヴァージニアと私は、1972年のカンヌ映画祭で、9人の審査員のメンバーの中のひとりに選ばれていたので、フランスに向けて旅立った。私は今まで決

して熱心な映画ファンではなかったので、16日間の期間中に1日に2回、世界中から参加した映画を毎日観て、作家の私はどのようにして映画の気のきいた、にわかの評論家になることが可能であるかと考えると、いささか落ち着きの悪い状況に、しばしば身を置くことになった。

その結果として、私が自信をもってその年の一等賞に選んだ映画が、「エレミヤ・ジョンソン」というタイトルのロバート・レッドフォードの映画であった。たとえ多数の審査員が「楽園の労働者」というタイトルの、イタリア映画の参加作品に、一等賞を与える方へ傾いたとしても、私の決定は断固として不動のままであった。

3年間にわたって、年一度の資料収集の旅行は、ヴァージニアと私が、第2作目の共同制作を出版する予定で始めたのだが、1973年に実行された。これは彼女が線画の挿絵を書き、文章は私が担当する本であった。この本は、『中部アメリカの午後』⁽²³⁾というタイトルで、ルイジアナ割譲地の初期の地域を、現代の印象をもって描いたものである。取材と執筆には3年を要し、その他には、なにひとつ執筆活動はしなかったが、何回か時間を使い果たすような中断があった。

癌が見つかって、連続して2年間、初めは右の肺、次に左の肺の癌の剥去手術を受けるため、時間をとることが必要であった。それぞれの手術の後に続く回復の期間は、完全に無活動に縛られてはいなかった。ひとつには私たちは、ポーランドのワルシャワでのブックフェアに参加して、長い週末を過ごすことができたからである。もうひとつには私は、インデアナ州のローディングでミス・ヌード・アメリカ・コンテストの審査員のひとりになったことである。その体験でもっとも珍しい光景は、洋服を着ているのが、目立って目につくといった、風変わりな体験をした。そして、もっとも珍しい私たちの結婚記念日のひとつには、ヴァージニアと私が、大晦に検診のため、メイヨー・クリニックに入院した時に祝われた。私がクリニックで受けた真面目な忠告は、以前から永久にタバコを止めるように申し渡されていたが、ロシアのウォッカ、日本酒、ケンタッキー・バーボンに代えて、今後は白ワインを飲みなさい、と言われたことであった。

1976年の初め、私は5度目で最後のUSAツアーフを終えた。この時の旅行スケジュールの領域は、低地諸国とスカンジナビアに限られた。たまたまこの時期は、特にデンマークとスウェーデンでは、学園紛争の渦中にあり、自立の合団として、ストライキやボイコットを企て、時代送れの教授を若い教師に交替させる、という要求をつきつけていた。

デンマークでは、私はコペンハーゲン大学で話す予定であったが、学生たちは教室を去り、大きなカフェテリアに、教授抜きで集まっていた。私は教授陣が待っている、講堂に現れないようにと頼まれ、その代わりに、カフェテリアのテーブルに腰掛け、興味ある学生たちがきたら、討議の相手になって欲しいと言っていた。次に、オルフス大学では、学生たちは、私の講演に出席していたが、しかし、教授たちは参加しないようになっていた。そして、オーデンセ大学での場合は反対で、学生たちが私の講演をボイコットし、教員のメンバーだけが出席したのである。

スウェーデンでは、ウプサラ大学での日常のクラス集会は、完全な混乱になった。私の講演が、土壇場になって取り消された時、私たちは数人の教授とともに、洞穴のような地下のレストランで夕食をとった。多分私たちが、もし教員のメンバーと一緒にいるのを目撃されたなら、反抗的な学生たちによって、迷惑きわまりない非難の的となっていたであろう。ウプサラ大学での一夜の後半は、私たちは学生委員会主催による、地上で騒々しいクラブに連れて行かれて

歓迎された。この学生のクラブでは、音楽の音やビールの飲用も可である、とても非公式的な講演の場になったのである。

この旅の終わり頃に、私は初めてアレキサダー・コールダーに会い、彼が私の『アラン・ケントの冒瀆』⁽²⁴⁾という本の、フランス語版と英語版に、風変わりであるが、個性的で想像的な挿絵を書いてくれたことに対して、個人的にお礼を申し述べた。

これにより数年前から私は、私の翻訳を長いこと手がけている、フランスの翻訳家マルセル・デュアメルのアンチープの別荘を何回か訪れていて、そこで私は彼の隣人のパブロ・ピカソに紹介された。ピカソは、『アラン・ケントの冒瀆』に挿絵を入れることを、彼自身のスケジュールに入れたいと語った。しばらくして彼は死に、その挿絵を書くことに同意したのがサンディー・コールダーであった。デュアメルの意見によれば、挿絵の数ではピカソよりコールダーの方が多く、多分その本を購入しようという人にとっては、誰の作品より魅力的なものであろう、ということだった。その一揃いの完全な書物を見た後、私は十分に納得した。

1976年から1977年にかけての真夜中に、私たちはフロリダからミシシッピー川の西側のどこかへ転住するのを、何人にも邪魔されたくない、というのを新年の決意とした。再び、私はそわそわ落ち着かなくなり、変化を求めて転住の必要性を感じた。その上、ヴァージニアはフロリダのじめじめした気候は、たびたび痛む関節炎がますます苦痛になったことを認めた。2つの十分な理由は、私たちを前へせき立て、私たちはダンイーデンの家を競売に出して、手ごろな新しい家が見つかれば良いと強く望みながら、コロラドスプリングスにやって来た。1月の第2週目のことであった。

コロラドスプリングス全域での、私たちの家探しの数日は、初めから終わりまで落胆したものであった。そして私たちは、期待外れからできるだけ回復するために、ダンイーデンの家へ戻って来た。数週間後、やはり、決心を新たにした私たちは、なかなか見つからない新しい家を探して、ニューメキシコ州のアルバカーキに来ていた。私たちはまる1週間、希望を抱いて街の内外を、とり急ぎ探ししまわったあげく、私たちはどうして2度も、快適な環境と心地よい暮らしを提供してくれる、適当な家を見つけるのに失敗したのだろうかと思い、心を残しながらフロリダへ舞い戻った。

私たちが不在の間に、ダンイーデンの家が売れたということを、不動産プローカーによって知らされたのは、驚くべきニュースであったが、同時に、この予期せぬ知らせは不安ももたらした。コロラドスプリングスとアルバカーキでの失敗の記憶が、心に強くこびりついていて、他の家探しに出向いて、うまくしかるべき家を見つけて、30日以内に私たちの家財を引き払って、新しい家主に引き渡すのは、きわめて考えにくいことのように思われた。

私たちの心配事は、そう長くは続かなかった。そのあわてふためいた不安は、和らいだ冷静さに取って替えられた。新年の決意をしてから、初めて心の安らぎを持てた。私たちの心に浮かんできたのは、私たちがアリゾナ州のスコットデールの、いくつかの住宅区域の住宅供給関係の人たちと、なじみ深かったことを思い出したのであった。その時、私たちが気づいたことだが、フェニックス郊外より他の何処にも住みたくないという不満の種があって、私たちの訪問した、他の都市に住むというふうに、心が動かなかったのだと理解した。すぐに決意をかためて、私たちの探していた新しい家が、私たちを待っているだろうという自信をもって、ダンイーデンを去ってスコットデールへ向かったのだった。そして、その通りに事は運んだ。

私の75歳の誕生日を迎えた年、ドミニカ・アメリカ協会により企画された、1週間開催されるセミナーに参加するために、ドミニカ共和国を訪問した。数週間後、私は異なったグループの社会学者や教育学者たちと一緒に、同じくらいの期間の長さのセミナーに参加するためグアテマラへと行った。そのセミナーは、グアテマラ・アメリカ協会によって企画されていた。

12月の私の誕生日の2週間前、ヴァージニアと私はアリゾナを出発して、ホワイトハウスの歓迎レセプションに出席した。ヴァージニアが並んでいる列が、カーター大統領に近づいて、彼女が紹介されたとき、彼女は衝動的に前に身を乗り出して、そして大統領の頬にキスをした。警護の保安員の数名に突然動搖が起き、彼らの断固たる身振りに促されて、彼女は元気に進み出て、大統領夫人と握手をした。カーター夫人が、カーター氏にその出来事についてどのような話をしたか、私は知らない。

ホワイトハウス訪問の数日後、私たちはヴァージニア大学での晩餐会に出席するために、シャーロットヴィルに到着した。私の理解するところでは、この会は、わずか数名の出席者のみと考えていた。この集会は温厚な愛書家で、この大学のバレット図書館の寄贈者である、ウォラー・バレット氏によって企画されていた。

バレット図書館で開催される、誕生日の晩餐会の前のレセプションには、100名以上の人々が出席した。晩餐会の着席のアナウンスが流れると、さらに多くのゲストが臨席した。私は、このような大多数の集会の目的は何であるか、とすでに不思議に思っていた時、驚いたことには、ヴァージニア大学学長のフランク・ヒアフォードが私の前に立ち、「あなたの青年期を過ごしたキャンパスへようこそ」と歓迎してくれた。私はUDC奨学金を給仕された学生であり、玉突き場の雑役係であった昔のことについて、深く物思いに耽っていたので、ウォラー・バレット氏が、私の最近のエッセイを朗読するように、という予期せぬ配慮をしてくれたことに対して、どう感謝を述べたらいいか分からなかった。

この朗読の発言は、この晩2度目の驚きであった。1年前ジョージア大学から、「地球上の一訪問者の記憶」⁽²⁵⁾というタイトルで、私のエッセイが出版されていた。そしてその晩、小冊子の一冊を手渡されて、私が辞書の中から拾い集め、長いこと発音してみようとさえしなかった、珍奇な単語の羅列した多くのページを、大衆の面前で朗読することを求められたのであった。不明瞭な発音でつまづきながらも、私は黙読用に印刷された、私のエッセイの全文をなんとか終わりまで声に出して読むことができた。

私の不器用な発音を除いては、その晩は、学業中途退学したアラムナス〈校友〉であり、オフ・キャンパスの、玉突き場の接客係であった私にとっては、昔日を回顧する楽しい晩であった。翌朝、「ニューヨークタイムズ」紙の記事では、大衆の面前で朗読したことは、幸いにも削除されてあったが、南部作家の復活を祝して、ヴァージニア大学で、誕生記念式典と晩餐会が開催されたと報じていた。復活した、しないはともかくとして、ウォラー・バレットがひとりの南部人として、ひとりのアメリカ人として、私が今までに物した著作を、高く評価してくれたことに感謝した。

当初からの私の目標は、生活の喜びを謳歌し、生きることの悲哀に反発する人々の、内なる精神を映し出す作家になることであった。この世に生を受けて、私の作品のひとつに登場することになった、男性や女性たちの苦悩や歓喜を、したり顔で歪曲することを、私は今まで作家として抵抗してきた。

完璧な作品を完成することは至難な業であるが、私は出版された物語を手直しして、後日、改訂版を出版するのは気が進まない。同様に、私は自分が今までに犯した過失を修正する目的で、人生を再びやり直したいとも思わないし、人生行路で犯した間違いを、あえて訂正しようとも思わない。自分の著作と私自身は、不完全さをもすべて包蔵しつつ、わが生命尽き果てるまで存在するという認識を持って、自分自身の欠陥を容認していきたいのである。

本誌に翻訳されたものは、*Contemporary Authors Autobiography Series*, Vol.1. (Gale Research, 1984) の中の Erskine Caldwell (pp.139-157) の全訳である。

第3期卒業生となる私の担当のゼミ学生諸君19名は、夏季休暇の宿題として、均等に割当てられたページを試訳して提出 (9.27) した。

その後、私は2ヵ月をかけて、草稿のグラマー・チェックや誤訳を厳しく指摘し、個々の学生と度々検討を加え、フロッピイを添えて再提出 (11.26) を求めたものである。

日本に初めてCaldwell文学を紹介した、故西川正身先生の名文句のひとつに「辞書と鉄は使いようで切れる」というのがある。当節世にはびこる拙速主義にいたずらに陥ることなく、英米の大型辞書をもドカン、ドカンと引き、できるだけ時間をかけて、テクストの一字一句といえども、決して疎かにしない姿勢を培ってもらいたいという、担当者の教育的眼目もあった。

このような形で、Caldwellエッセイ〈本邦初訳〉の訳業を完成できたことは、たとえハードな体験を強いられたにせよ、学生諸君にとっては、回顧してよい思い出になると考える。

翻訳者氏名：野口智子、本間淳子、渡部真理子、川本奈央、石川佳代子、福田涼子、石塚桂子、金子まち子、玉木政恵、渡辺知子、永喜多静波、藤田雪江、二宮達也、鈴木健大、若井誠、渡部政哉、清田広行、高野伸一、金原貴志（以上19名）

特に、二宮達也は、編集人として全体の文体を整え、校正にも当たった。

また、版権を所有するGale Researchから「翻訳許可」⁽²⁵⁾を得るに当たっては、本学のサンフォード・ゴールドスティング教授から、親切なご教示をいただいたことを感謝する。

（北嶋藤郷）

Acknowledgments:

With many thanks to Joyce Nakamura, Managing Editor of Gale Research, for permitting Fujisato Kitajima and his seminar students of American Literature at Keiwa College to translate this essay from *Contemporary Authors Autobiography Series*, Volume 1, pp.139-157, 1984.

We also wish to thank Virginia Caldwell for supplying us with the information for contacting Gale Research.

註

- (1) A.R.P.→Associate Reformed Presbyterian (Church)
- (2) YMCA→Young Men's Christian Association
- (3) "A Boy's Story of City Life"
- (4) UDC→United Daughters of the Confederacy
- (5) *American Earth*. New York: Scribner's, 1931.
- (6) *Tobacco Road*. New York: Scribner's, 1932.
- (7) *You Have Seen Their Faces* by Caldwell and Margaret Bourke-White. New York: Viking, 1937.
- (8) *North of the Danube* by Caldwell and Margaret Bourke-White. New York: Viking, 1939.
- (9) *Say, Is This the U.S.A.* by Caldwell and Margaret Bourke-White. New York: Duel, Sloan & Pearce, 1941.
- (10) *Georgia Boy*. New York: Duel, Sloan & Pearce, 1943.
- (11) *Tragic Ground*. New York: Duel, Sloan & Pearce, 1944.
- (12) "American Folkways." (Caldwell was editing a series of 25 books with the title of "American Folkways.")
- (13) *Desert Country* by Edwin Corle. New York: Duel, Sloan & Pearce, 1941.
- (14) *Palmetto Country* by Stetson Kennedy. New York: Duel, Sloan & Pearce, 1942.
- (15) *God's Little Acre*. New York: Viking, 1933.
- (16) *Jenny by Nature*. New York: Farrar, Straus & Cudahy, 1961.
- (17) *Close to Home*. New York: Farrar, Straus & Cudahy, 1962.
- (18) *The Last Night of Summer*. New York: Farrar, Straus, 1963.
- (19) *Around About America*. New York: Farrar, Straus, 1964.
- (20) USIS→United States Information Service (United States Information Agency, a section of the Department of State)
- (21) *The Weather Shelter*. New York & Cleveland: World, 1968.
- (22) *Annette*. New York: New American Library, 1973.
- (23) *Afternoons in Mid-America*. New York: Dodd, Mead, 1976.
- (24) *The Sacrilege of Alan Kent*. Portland, Me.: Falmouth Book House, 1936.
- (25) *Recollections of a Visitor on Earth*. Athens: The University of Georgia, 1977.
- (26) The letter from Joyce Nakamura, Managing Editor of Gale Research Inc., is dated January 3, 1997.

Dear Professor Kitajima:

I regret the delay in responding to your request to translate into Japanese and publish Erskine Caldwell's essay from Volume 1 of *Contemporary Authors Autobiography Series*. Your initial letter of request was referred to me as managing editor of the team that produces this series.

Since your request came to my attention, I have discussed this issue with a Gale Research Permissions manager, our Thomson Corporation foreign rights contact in New York City, and a Thomson foreign rights contact in Tokyo. All have agreed to grant permission for translation of the Caldwell essay.

McIntosh and Otis, Inc., as agents for the copyright owners of the works of Erskine Caldwell, indicated no objection to translation of the Caldwell essay.

Gale Research, with the agreement of McIntosh and Otis, Inc., grants permission on the conditions outlined in your letter:

- the translation will be published only in a Keiwa College publication, *Veritas*, which is not for sale and is given exclusively to Keiwa College students
- the printing will be no more than 1,000 copies
- the project is for educational purposes only and no profits are to be made on this translation

In addition, Gale Research would appreciate your providing an appropriate credit line citing the original source of publication.

Would it be possible for me to receive a copy of the translated essay as published in *Veritas*?

I hope you will contact me if you have any questions or concerns.

Cordially,

Joyce Nakamura
Managing Editor

(レポート指導教員 北嶋藤郷)